

〈調査報告〉

教師・学校・地域を評価する「評価リスト」作成の試み

——小・中学校「学校インターンシップ」の指導に向けた教材作成の試み——

藤 原 靖 浩*

An attempt to create a “Evaluation list” to evaluate teachers, schools, areas
——Teaching materials for guidance of elementary and junior high school internship——

Yasuhiro Fujiwara

要旨：平成 26 年から導入が議論されてきた「学校インターンシップ」は、平成 30 年度から教育実習を一部代替あるいは補充する形で導入される。これに伴い、各大学では「学校インターンシップ」の準備が進められており、理論と実践の往還を目指して、すでに多くの実践が報告されている。しかしながら、そのほとんどはカリキュラムの開発や実習校の選定など、内容の整備に関するものであり、その事前の準備や内容の具体的な改善については今後の課題とされていた。そこで、本報告では、実際に「学校インターンシップ」に行く学生の指導に活用できる教材として書き込み式の「評価リスト」の作成を試みた。作成にあたっては、教師が「学校や地域、教師自身をどのような視点で評価しているか」について記入した自由記述から KJ 法を活用して分析した。その結果、教師、学校、地域に関わる 3 つの大分類、7 つの中分類、23 の小分類が得られた。今後は書き込み式の「評価リスト」の内容をより精査し、詳細な項目を確認したチェックリストの作成とそれらを活用した具体的な学生指導を行っていくことが課題である。

Abstract：“School internship”, whose introduction has been discussed since 2014, will be introduced as part of replacement or supplementation of teaching practice from 2020. In line with this, preparations for “school internships” are under way at each university, and several practices have already been reported in order to return to theory and practice. However, most of them relate to the maintenance of the contents such as the development of the curriculum and the selection of the practical training school, and the advance preparation and the concrete improvement of the contents were considered as the future issues. Therefore, in this report, we tried to create a “Evaluation list” as a teaching material that can be used to teach students who actually go to “school internship”. In making, I analyzed using the KJ method from the free description which the teacher wrote about “How do you evaluate the school, the area and the teacher himself?”. As a result, three major classifications of teachers, schools, and areas, seven middle classifications, and 23 small classifications were obtained. In the future, it will be necessary to scrutinize the contents of the “Evaluation list” of the writing type, create a checklist that confirms the detailed items, and provide specific student guidance using them.

Key words：学校インターンシップ School Internship 評価リスト Evaluation list KJ 法 KJ Method

I 問題と目的

平成 24 年、中央教育審議会は『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答

申）』を出し、教師の養成から採用、研修に至るまでの手続きを言及した¹⁾。この答申に応じて、各大学は文部科学省から平成 30 年度の教職課程の再認定を受ける準備を進め、平成 31 年度（令和元年度）から新たな教職

受付日 2019. 5. 22 / 掲載決定日 2019. 9. 12

*関西福祉科学大学 教育学部 講師

課程をスタートした。この流れの中で、平成 26 年 7 月に『これからの学校教育を担う教職員やチームとしての学校の在り方について (諮問)』²⁾が提出され、平成 27 年 12 月の中央教育審議会『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)』³⁾によって、「学校インターンシップ」の導入が本格的に進められることになった。その答申の中で、「学校インターンシップ」は次のように説明されている。

「教職課程の学生に、学校現場において教育活動や校務、部活動などに関する支援や補助業務など学校における諸活動を体験させるための学校インターンシップや学校ボランティアなどの取組が定着しつつある。これらの取組は、学生が長期間にわたり継続的に学校現場等で体験的な活動を行うことで、学校現場をより深く知ることができ、既存の教育実習と相まって、理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成に有効である。また、学生がこれからの教員に求められる資質を理解し、自らの教員としての適格性を把握するための機会としても有意義であると考え。さらに、学生を受け入れる学校側においても学校の様々な活動を支援する地域人材の確保の観点から有益であることが考えられる。」⁴⁾

答申からも分かるように、学校教育現場では実践的な指導力を備えた即戦力の教師の育成が喫緊の課題である。そして、平成 31 年度 (令和元年度) までに多くの大学では「学校インターンシップ」またはそれに類する新科目を設置した。

大学では、インターンシップに類似した活動として、「学校支援ボランティア」「サービスマーケティング」などが挙げられる。森下は、各大学で実施されている教員養成の質保証・高度化に資する多様な活動を総称して「体験的プログラム」と呼び、そのうち、学生の自主性を重視し、自由度の高い活動を「学校支援ボランティア」、学生が学校に適応するための学習活動を「学校インターンシップ」、学生と受け入れる学校側との組織化された活動を「サービスマーケティング」として区別している⁵⁾。学生が学校に適応するための学習である「学校インターンシップ」の意義について、田島らは、教師としての資質・能力を高める機会であるだけでなく、教員養成と教員採用の溝を埋めるために活用できるものであり、近い将来、「学校インターンシップ」に参加する学生のあり方に合わせて大学の指導体制も変わっていく可能性が期待されていることを指摘している⁶⁾。

すでに「学校インターンシップ」を実施している大学

の先行研究では、京都産業大学の事例が確認できる。2018 年度から新設された「学校インターンシップ」の科目には 20 名以上の学生が参加し、京都府内の学校で平均して 1 週間の受け入れが行われていた。また、参加者の学生へのインタビュー調査を通して、「学校インターンシップ」の効果を検証することを試みていた⁷⁾。このような取り組みを見ても、2019 年度以降、各大学では「学校インターンシップ」が実施され、今後、教育実習との比較検討による効果のちがいや、カリキュラム上の位置づけに関する研究は進められることになると予想される。

しかしながら、どの大学においても「学校インターンシップ」における事前の指導方法については今後の課題としているに留まっている⁸⁾。学校教育現場を児童・生徒の立場でしか経験したことのない学生にどのように指導を行うのかに関しては、多くの大学が試行錯誤している点であろう。そこで、本報告では、「学校インターンシップ」に向けて学生の指導に活用できる教材の作成を目指して、教師・学校・地域を学生が評価する視点をまとめた書き込み式の「評価リスト」の作成を試みた。「評価リスト」を活用した先行研究は、主に医療の分野で確認することができる。船山らによる臨床実習における評価リストの活用⁹⁾や、患者の日常行動を評価するため¹⁰⁾に活用されている。これらの評価リストは、患者や医者へのインタビューや記述から作成されており、本報告でも自由記述を参照した作成を試みた。特に、「評価リスト」の作成に当たっては学校教育現場で実際に働く教師が、学校、地域、そして教師自身を評価する際に、どのような点に注目しているのかという点について記入したものを参考にしている。なお、本報告では、収集したデータが公立の小学校・中学校のものであったため、「評価リスト」は公立の小学校・中学校を対象としたものとしている。

Ⅱ 方 法

本論文で作成を試みた書き込み式の「評価リスト」は、学校教育現場と学校を取り巻く地域の様子を理解するにあたって、学生自らが実際にその場所に足を運び、学校や地域の状況を整理し、理解することを目指して使用する教材の 1 つである。その作成は、KJ 法¹¹⁾を用いて以下の内容で行われた。なお、リストの作成に KJ 法を応用する先行研究は理学療法の分野等で確認することができる¹²⁾。

1. 対象

分析データとして使用したのは、筆者の担当した教員

研修（生徒指導に関する内容）、ワークショップ（学校と地域の連携に関する内容）の際に収集したものである。対象者は、公立中学校の生徒指導担当者 38 名、公立小学校教師 18 名、地域関係者 20 名の合計 76 名であり、それぞれの対象者に対して、研修やワークショップの中で、「学校インターンシップ」の学生の指導のためのシートを作成する目的があることを説明した上で、教師自身が教師を評価する視点、学校を評価する際の視点、地域を評価する際の視点について質問し、自由記述での回答を求めた。

2. 分析

KJ 法を採用した理由は、全体の傾向を見つつも、一人一人の考えを丁寧に見ていくためである。分析には大学教員 3 名が参加し、以下の手順で行った。

①授業、学校、地域を評価する際に注目される場所や気づきに関する表現を抜き出し、カードに書き出す。一例を挙げれば、次のようなものになる。

自由記述 1

学校に行ったとき、はじめに見るのは校門付近の手入れが行き届いているかどうかです。次に、校内に入ると廊下の掲示物、廊下の清掃の様子を見ます。教師の表情等にも注目しますが、落ち着いた学校であるかどうかは教師の様子を見なくても校内外の様子を見ただけでわかります。

ここから抽出するのは「校門付近の手入れ」「廊下の掲示物」「廊下の清掃」「教師の表情」という 4 つである。同様の方法で、すべての自由記述から表現を抜き出した。

②すべてのカードの内容を丁寧に確認し、共通しているキーワードや繰り返し出てきた言葉をチェックした。その後、同じような言葉を軸に名前を与えてラベル付けを行った。さらに、ラベル分けしたものの内、類似した内容についてグループ分けを行った。大項目は、「学校」「教師」「地域」という 3 つのグループになるまで作業を行った。同様に中項目を 7 つ、小項目を 23 個作成した。

④それぞれの項目をエクセルファイルにまとめて 1 つの表として整理した。

以下、表 1 の内容について具体的に述べていく。

表 1 グループ分け

大項目	中項目	小項目
学校	校舎外	校門の周辺の様子
	校舎内	トイレの様子
		掲示物の様子
		廊下の様子
		生徒の様子（休み時間を含む）
	教室	教室内の設備
		黒板の様子
		授業の様子
		生徒の様子や態度
	教師	教師の様子と態度
		教師の様子や態度
	教師の机の様子	地域
		住宅
		住居の種類
雨戸の開閉	空き家の有無	住民
		高齢者の人数
通行人の数	街中	地域の様子や雰囲気
		街の掲示板
		街路樹の状態
		街中のゴミの有無
		街灯の有無
		子どもが立ち寄る場所の有無
		通学路の安全性

Ⅲ 結果と考察

1. 結果

分析の結果、3 つの大項目と 7 の中項目、そして 23 の小項目が得られた。

最初に得られた 76 の自由記述を整理したところ、学校や地域を評価する際には、【学校】【教師】【地域】という 3 つの大分類があることが確認された。分析当初は、学校と地域という 2 つの大分類で分析する予定であったが、教師に関する記述が多数見られたため、大分類を 3 つとすることになった。なお、この【学校】には、小学校・中学校の 2 校種が含まれている。

【学校】の大項目の中には校舎の中と外の様子、教室の中の様子から評価する内容の記述が確認された。【校舎外】の中項目には、「校門の周りが綺麗に掃除されているかどうか」「校門周辺が整備されているかどうか」「校門付近の手入れが行き届いているかどうか」等の記述を分類した。【校舎内】の中項目には「学校の清掃は行き届いている」「廊下の掲示物が丁寧に貼られている」「校内の清潔感がある」「トイレが綺麗である」「トイレトーパー等の備品がそろっている」「廊下ですれ違った児童（生徒）が自主的に挨拶をする」「休み時間を

楽しそうに過ごしている生徒が多い」「休み時間に生徒が集まっている場所がある」等の記述を分類した。校舎内に含まれるものであるが、子どもの生活や活動の基盤となる【教室】は別の中項目とした。「児童のロッカーが整頓されている」「机の上が整理されている」「教室内の掲示物が適切である」「教室内の整備」「黒板が綺麗である」「次の授業までに黒板が消されている」「黒板の周辺が整えられている」「生徒たちは教師の方を見て授業を受けている」「寝ている生徒がいない」「授業準備をしていると感じる」等の記述を分類した。

次に、【教師】という大項目では、【教師の様子や態度】を中項目とした。これは学校内における教師の様子や態度であり、「廊下ですれ違った教師が自然に挨拶をする」「教師が下を向いて歩いていない」「職員室の教師の机は整頓されている」「教師の表情が明るい」「教師の身なりに清潔感がある」「教師にやる気が満ちている」等の記述を分類した。

最後に【地域】の大項目には【住宅】【住民】【街中】という中項目を設定した。地域の様子を評価するための視点として、【住宅】には「一戸建てが多い、団地が多い」「家の手入れが行き届いている家が多い」「子どもを守る家が整備されている」「雨戸が締まっている家が多い」「空き家が少ない」「花が植えられている、木々が剪定されている」等の記述を分類した。【住民】には「地域には高齢者が多い」「通行人とすれ違うことが少ない」「住民が少ない」等の記述を分類した。そして、【街中】には「活気がある」「住みたい街である」「街路樹の手入れが行き届いている」「街中にはゴミが少ない」「街灯が多い」「公園が多い」「子どもたちが放課後に集まる場所がある」「車通りが多い」「通学路は安全である」「児童が安全に通学できる」等の記述を分類した。

2. 考察

ここではそれぞれの中項目と小項目について考察する。作成した「評価リスト」では、76 の記述から中項目、小項目としてすべての内容を整理したものを採用している。【校舎外】の中項目では、校門の周辺の様子を見ることで学校の様子を評価できるという意見が多かった。これは【校舎内】の中項目にトイレの様子や掲示物の様子という意見が含まれているのと同じものであり、学校の内外の環境が整えられていることが、学校が落ち着いていることを表すものであることは多くの人にとって共通の認識であると考えられる。

学校の様子を評価するためには、児童生徒の様子を確認することを忘れてはならない。今回の記述で最も多かったものの 1 つが【校舎内】での児童生徒の様子に関す

る記述である。特に「挨拶」についての記述は多く、生徒が自主的な挨拶ができることが多くの人にとって評価の基準になりうることが示唆された。同じように記述が多かったものは【教室】の授業に関するものであった。教室の評価の中心が授業になることは想像に難くない。また、教室内の生徒の様子以上に評価の対象になっていたのは教室内の設備であった。記述の中には、「パッと見たときに教室が綺麗である」「教室の中に本が置かれている」というものもあり、生徒の様子以上に、彼らが生活する場としての設備に関心があることが分かる。

分析者が予想していた以上に多かったものが【教師】に関する記述であった。上述の通り、当初は【学校】と【地域】という分類でまとめることができると考えていたが、実際には半数以上の記述に教師に関する内容が確認できたため、項目を細分化することになったものである。特に、教師が自主的な挨拶ができるかどうかという記述に加えて、「教師が廊下の端を遠慮がちに歩いている」「職員室の机の上が整頓されている教師が多い」「教師の服装に清潔感がある」のように、教師の細かい部分にまで評価の目が向けられていた点が印象的であった。

今回の「評価リスト」の作成に当たって最も注目された点は【地域】についての小項目である。学校を取り巻く環境を理解することは、子どもの様子を把握するために不可欠であるが、これまで地域づくりや都市計画における景観の評価を行うためのリスト等はあっても、どのような視点で地域を評価しているかをまとめたものは見られなかった。特に、今回の「評価リスト」は地域住民と教師という日常的に地域の様子を把握している人々から得た記述であり、汎用的な内容になることが期待できる。

【住宅】の中項目では、「一戸建てが多い場所と厚生年金の団地が多い場所等で所得格差が見られる」「最近空き家が増加しており、荒れている家が増えてきている」「平日の早い時間から雨戸を閉める家が多く、道が暗くなっている危ない」等の意見が見られた。空き家や雨戸の話題等、実際に地域に住んでいる者でなければ見えない課題にまで注目する視点を得られたことは意義があると考えている。【住民】については、少子高齢化が進んでいると言われる現代社会ならではの視点である。記述の中には「平日は学校があるが、土日に地域を歩いても子どもの姿を見る機会が少なかった。元気な地域にはやはり子どもの姿が必要だと思う。」「大都市のように通行人が常にいるような場所ではなく、子どもを日常的に見守る目が少ないように感じる。(人が多ければその分別の問題が生じる可能性もあるが)」「高齢者が多く活気

を感じられない」等の意見が見られた。これらの記述は【街中】の中項目と共通しているもの多く、地域の様子や雰囲気を評価するための視点の1つだと思われる。また、【街中】の小項目にあるように、地域の様子を評価する際には「街中の掲示板は常に最新の情報が貼られている」「街路樹が綺麗に剪定されている」という点もあった。これらは地域にある自治会のような組織が機能しているかどうかを判断する基準になりうるということであった。自治会やそれに類する団体が地域の中で積極的に活動していれば、学校への協力も積極的であるという間接的な要因になるのである。「子どもが立ち寄り場所の有無」というのは、コンビニエンスストアやスーパーマーケットだけでなく、駄菓子屋や公園等、昔ながらの子どもたちの遊び場をイメージしている記述も見られた。また、意外にも記述が多かったものは「通学路の安全性」に関する記述である。「道が狭く危険が多い」「車通りが多い」「道路の側溝に溝蓋が設置されて子どもが落ちることがないように対策されている」等、地域の道路事情まで意識した記述が多かった。以上の内容から、地域を評価する際に、教師だけでなく住民の視点まで取り入れられたチェックリストになっていると考えられる。

IV まとめと今後の課題

本報告の目的は、「学校インターンシップ」に向けて学生の指導に活用できる教材として、学生が教師・学校・地域を評価するための1つの手法となる書き込み式の「評価リスト」を作成することにあった。そして、KJ法で得られた結果を元に、それぞれの小項目を一覧にし、学生たちが自ら記入できる「評価リスト」を作成した。それぞれの空欄の左上には、小項目を書き込み、具体的にどのようなメモを取るのかを示すために、記述を元に例文を作成した。実際に学校教育現場を訪問する、評価する際には学生がこの用紙を持ってメモを取ることができるようになっている。(表2)

田島らによれば、「学校インターンシップ」は、その実施にあたって、学生への理論の教授だけでなく、オリエンテーションとフォローアップを含めた組織的な取り組みが必要であり、実践に加えて大学教員による学問的な視点からの支援や省察が求められることを指摘されている¹³⁾。その一助として、本報告で作成した書き込み式の「評価リスト」を活用し、学生たちが学校や地域への理解を深めることが期待される。さらに、書き込んだ内容を元にした具体的なチェックリストの作成や、評価項目の作成等も検討している。

表2 書き込み式の評価リスト (一部)

評価リスト1	
地域の様子	例) 活気がある、住みたい街である、住民の様子
高齢者、通行人	例) 高齢者が多い、通行人はあまり多くない
街の掲示板	例) 最新の情報が掲示されている
街路樹の状態	例) 剪定されている
ゴミの有無	例) 道にゴミがたくさん落ちている、不法投棄がある
街灯の有無	例) 街灯が少ない
雨戸や空き家	例) 雨戸がほとんどの家で閉められている、空き家が目立つ

学生が記入した内容を指導する側が随時確認することで、記述内容にみられる学校に対する誤解や偏見を取り除く指導を行うことが望ましい。また、学校を評価するための資料には、個人の視点からの観察だけでなく、学校評価、学校経営計画、学校評議会の資料等、複数の視点が求められる。「学校インターンシップ」の実施の前には、実際の学校訪問で「評価リスト」を用いて確認した学生個人の視点に加えて、複数の学校に関する資料を比較することで、総合的な評価を行うことが必要である。

今後は、この「評価リスト」を実際に活用し、「学校インターンシップ」に向けた学生の学びを蓄積することを試みたい。

引用文献・参考文献

- 1) 中央教育審議会『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(答申)』2012年。
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf
- 2) 中央教育審議会『これからの学校教育を担う教職員やチームとしての学校の在り方について(諮問)』2014年。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/052/siryo/_icsFiles/afieldfile/2014/12/15/1354014_1.pdf
- 3) 中央教育審議会『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)』2015年。
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf
- 4) 中央教育審議会、上掲書、2016年、p.33。
- 5) 森下覚「大学と教育委員会による学校インターンシップの構築と変遷」『大分大学教育福祉学部研究紀要第37号第2巻』2015年、大分大学教育福祉学部、pp.287-300。
- 6) 田島充士・中村直人・溝上慎一・森下覚『学校インターンシップの科学』2016年、ナカニシヤ出版。
- 7) 牛瀧文宏・松本顕一「京都産業大学「学校インターンシップ」の開設－開設初年度に得られた成果及び課題と考察について－」『京都産業大学教職研究紀要』2019年、京都

産業大学教職課程教育センター、pp.11-28。

- 8) 学校インターンシップに関する今後の課題を示した論文については以下のものを参考にした。

原清治・芦原典子「学校インターンシップは教育実習の機能をどこまで代替できるか」『佛教大学教育学部論集』第 30 号、2019 年、佛教大学教育学部、pp.1-15。

佐藤史人・伊藤博美「『学校インターンシップ』に関する事例研究」『和歌山大学教育学部紀要』第 68 集第 1 巻、2018 年、和歌山大学教育学部紀要委員会、pp.239-245。

- 9) 船山貴子・武田貴好・長沼誠・田中基隆・高橋玲子・福田守・杉原敏道「臨床実習における実習指導者と学生の合否判定基準の相違」『Vol.37 Suppl. No.2 (第 45 回日本理学療法学術大会 抄録集)』2010 年、日本理学療法士協会、pp.2。

- 10) 白川雅之・増本康平・友田洋二・東山毅・横山和正「健

忘症患者における日常行動評価リストの開発」『神経心理学』23 巻 1 号、2007 年、日本神経心理学会、pp.49-57。

- 11) KJ 法は、川喜田二郎が考案したデータ分析の手法である。詳細については以下の先行研究を参照のこと。

川喜田二郎『発想法－創造性開発のために』中央公論社、1967 年。

川喜田二郎『続・発想法－KJ 法の展開と応用』中央公論社、1970 年。

- 12) 佐藤秀紀「チェックリスト作成における KJ 法の応用：常同行動の顕現的類型化を例にして」『理学療法学 Supplement』第 18 巻 1 号、1991 年、公益社団法人日本理学療法士協会、p.131。

- 13) 田島充士・中村直人・溝上慎一・森下覚、上掲書、2016 年。